

# ハイダ・グワイの陸と海

—世界遺産グワイ・ハーナス国立公園に行く—

Sustainable Tourism of Haida Gwaii, Canada:

Management of “Super Natural” World Heritage

小林 天心\*

KOBAYASHI, Tenshin

## はじめに

アラスカの南部は、カナダ西海岸のブリティッシュ・コロンビア（BC）州まで、細長く食い込んだ形になっている。俗にアラスカのパンハンドル（フライパンの取っ手）と呼ばれる部分だ。そのすぐ南の太平洋上に浮かんでいる島々が、ハイダ・グワイ（Haida Gwaii）である。ここに住む先住民族のことばで直訳すると「人々の島」。2010年になってカナダ政府は、ようやくここを先住民の正式名称である、ハイダ・グワイとすることに合意した。それまではクィーン・シャーロット島と呼ばれていて、多くの地図にまだこの名称が記されている。ハイダ・グワイは南北におよそ220キロ、中心は北にグラハム（Graham）島、南にモースビー（Moresby）島。この2つの大きな島を隔てるのが、ごく細いスキッドゲート（Skidegate）海峡である。周辺を180個ほどの小島が取り囲んでいる。

\* 本学経営学部教授



地図1

細長い逆三角形のハイダ・グワイは、広さがざっと1万平方キロだから、東京、千葉、埼玉を足したほどの面積。太平洋を渡って暖かい日本からの海流がこちら一帯を洗っている。アラスカやカナダ太平洋岸は、高い山脈と海流の関係から、雨量が多く（年間4000～5000ミリ、東京の数倍にもなる）気候は通年寒冷湿潤、しかし冬季でも気温が零下にまで下がることは少ない。したがってこの一帯には、スギ、ツガ、トウヒなどの巨大な針葉樹林が生い茂り、それらはまた分厚い緑の苔で覆われている。日本で言うなら屋久島のスギ林、白谷雲水峡を思い浮かべてみればわかりやすい。それが何百倍もの規模で一面に広がっている。

### 先住民ハイダ・ネーション

ここに住む先住民ハイダ・ネーションなど、2013年現在ハイダ・グワイの人口およそ4000人。1万数千年前の氷河時代に、ベーリング海峡がユーラシア大陸とアメリカ大陸をつなぐ陸橋だった頃、アリューシャン方面からアラスカ南部伝いに下ってきた人々が住みついた。かれらは豊かな陸と海の食糧に恵まれ、ここに永く独自の文化をはぐくんできた。大きなカヌーを操り周辺の島々や本土側と交易を行ない、ときに侵略・略奪にも及んだことから、俗に「北西太平洋のヴァイキング」などと称されることもある。\*末尾文献(5)

かつてハイダ・グワイには数十の村があり、最盛期には2万人近くのハイダ人が暮らしていたとされるが、今その面影はほんのわずか残されているに過ぎない。18世紀末ごろには、ここから数十キロ北、現在のアラスカ最南部プリンス・オブ・ウェールズ島にも、1700人ほどのハイダ人が移住していたと言われている。

現在モースビー島の南半分はグワイ・ハーナス(Gwaii Haanas：うつくしい島々)という名前の国立公園になり、カナダとハイダ双方による慎重な公園管理と海洋保護の経営が行われている。こ

の国立公園を有名にしているのが、モースビー島南端近くの太平洋上に浮かぶ小島、スカン・グワイ(SGang Gwaay)である。19世紀後半に無人となったこの村は、それからおよそ100年後の1981年に世界文化遺産に登録された。この村に行くには、現地で催行されているツアーに参加し小型船舶で渡るか、カヌーを漕いでゆくか、小型水上飛行機によるしかない。

かつて日本に広く住み、今は北海道の一部にまで押し込められてしまった日本の先住民がアイヌである。1～2万年前の氷河時代にまで歴史をさかのぼってみると、アイヌとハイダは兄弟分になる。双方とも文字をもつことがなく、彼らの歴史は口伝によって継承されてきた。ベーリング海峡を渡った兄弟分たちは何派かに分かれ、北はグリーンランドまでイヌイトとして、カナダ・アメリカ中央へも多くの部族名のもとに、そしてさらにメキシコから南米、その西端のフエゴ島まで、長い時間をかけて南下、広がっていった。

アラスカのパンハンドル部分は、「クリンギット」という先住民のエリアだ。ハイダとクリンギットはきわめて共通点の多い文化をもっているし、18世紀の白人との接触以降迎った運命も同じである。\*<sup>(17)</sup>ハイダ・グワイと目と鼻の先にあるカナダ本土側の、ティムシアンやニシュガという人々も、その運命から逃れられなかった。

こうした南北米大陸における1000万人とも2000万人ともされる彼らが、ユーラシア大陸の西端から船に乗ってやってきた「白人」と遭遇するのは、ようやくつい最近、1492年のコロンブス以降である。\*<sup>(12,14)</sup>

ハイダ・グワイ地方においても、ベーリング海峡から南下してくるロシア人や、メキシコやカリフォルニア方面から北上してくるメキシコ人などとハイダ人が出くわすのは、1700年代半ば、日本の江戸中期のこと。白人たちの主な目的は、ビーバーやラッコなど動物の毛皮だった。しかし、白

人たちが持ち込む病原菌に抵抗力が全くなかったハイダ人は、それから100年間ほどでほとんど絶滅の危機にまで追い込まれてしまう。

ハイダの文化は、その陸と海とから不可分である。しかしとくに19世紀末以降、人々の歴史を伝える、多くの廃村に残された建物や各種の柱など（トーテムポールと呼ばれるが、正確にはそうではない：後述）は、多くが無人生主とされた廃村から持ち出された。十数メートルに達するポールはそのまま、あるいは気に入った部分だけ切り取られ、勝手に島の外へ運ばれてしまったのである。それらは個人的に所有されたり、カナダ・アメリカ各地の博物館に、遠くはロンドンの大英博物館やオーストラリアにまで分散した。残された廃村や多くの記念柱は、深い森と苔の中に埋もれ、彼ら祖先の身体や霊とともに、徐々にハイダ・グワイの土に還りつつある。<sup>\* (3.5)</sup>

### ハイダ文化の再興

20世紀後半になり、ハイダ・ルネッサンスが起こる。少しずつ人口が回復してきたハイダ人による、言語や各部族伝統文化の保存、建築・彫刻・装飾の技法などが、意図的に継承・再現され始めた。ハイダのプライドが甦っている。そしてこのカナダ北西海岸部に位置する、ハイダの独特な生活様式や芸術文化は、ようやく世界中から高い評価と尊敬を獲得しつつある。さながら太平洋におけるポリネシア文化、ニュージーランドにおけるマオリ文化の再興・再評価を連想させる動きと言っている。

ツーリズムの世界に長く身をおき、1970年代から80年代の、日本におけるカナダ観光開発に深く携わってきた私は、20世紀末までアンソニー島とかニンスティンツと呼ばれたスカン・グワイに、早くから強い興味を持ってきた。しかし距離と時間という2つの制約から、なかなかここを訪れる機会がなく、ようやく2013年の8月になって希望

がかなった。ゾディアックという小型のエンジン付きゴムボートに乗り、グワイ・ハーナス国立公園と、スカン・グワイの世界遺産地区を巡ったのである。

このレポートはその時の体験をもとに、ハイダの自然と歴史や文化、その独特な国立公園の管理・経営について述べる。さらにハイダの人々の手によるグワイ・ハーナスのツーリズム管理と経営につき、最近の状況を紹介してみたい。

なお現在ハイダ語に関しては、ローマ字表記による「ハイダ語復活計画」とでもいうべき、SHIP (Skidegate Haida Immersion Program) というプロジェクトが進行中である。ハイダ地域ではアラスカ南部からカナダ西岸にかけ、多くの近似言語が話されていたが、各村々によって発音などにかなりの変化が見られた。ハイダ・グワイ内の集落ごとでさえ差異があった。現在ハイダの人々は主に、グラハム島北部のマセット (Masset) と、同島南部のスキッドゲート (Skidegate) という2カ所に住んでいるが、これらの人々の間でもなお、発音表記に微妙な差がある。したがって、彼らの言語をローマ字によって統一し、標準表記にまでもっていく作業は並大抵ではなく、上記 SHIP によるハイダ語標記法完成には、まだまだ相当な時間が必要とされるであろう。なお当稿におけるハイダの地名などカナカナ表記は、SHIP による発音表記解説に拠っている。<sup>\* (4)</sup>

## 1. ハイダ・グワイの歴史

### 1) 白人たちがもたらした激動の時代

ハイダ・グワイの海域に最初にやってきた白人は、1740年代のロシア人たちだった。彼らはフィヨルド地形のアラスカ・カナダ沿岸部を下って、カリフォルニア方面にまで達し、メキシコ方面か

ら北上するスペイン人たちと交錯する。

ハイダについての記録に残る古いものは、1774年に木造のコルベット艦サンチアゴに乗り、サンフランシスコの南モンレーからやってきた、ファン・ペレスである。スペイン総督の命による北緯60度までの探検だった。当時の北西太平洋岸はヨーロッパの地図上になにも描かれていなかった。全く白紙だったのである。ペレスは北緯55度近くにまで到り、岩だらけの海岸に上陸し、そこをカボ・サンタ・マルガリータと名付け、大きな木の十字架を立てた。これが現在グラハム島の北西角に位置するランガラ（Langara）島のセント・マルガリータ・ポイント。カリフォルニアからアラスカの間における白人たちの最初の命名だったという。だが彼らは強風によりすぐに押し流され、南下を余儀なくされる。そして海上から深い霧を通し山脈のてっぺんを望遠したかれらは、この山々にシエラ・デ・サンクリストバルという名前を付けた。これが現在のモスピー島にある、この島の脊梁というべきサンクリストバル（San Christoval）山脈だ。かれらはバンクーバー島のヌートカ湾に帰り着いたが、総督の覚えは目出度くなかったらしい。ヌートカ湾にはこの頃、毛皮の交易所として人が集まり始めていた。当時アメリカ東海岸では、東部13州の独立戦争が始まろうとしている。

つぎの記録に登場するのは例のキャプテン・クックである。彼は3度目の太平洋航海で、カナダの北を回り大西洋から太平洋に出る航路を、太平洋側から探ろうとした。いわゆる北西航路の発見という、3世紀にわたる英国の悲願である。1777年、かれはヌートカ湾を出てハイダ・グワイ沖をとおり、現在のアンカレジ、ベーリング海を北上、北極海にまで至った。しかし北西航路の発見は諦めハワイまで南下したところで、原住民とのトラブルに巻き込まれ殺される。彼の航海記に、この北西太平洋に豊富に棲息するラッコのことが紹介



出所：Ninstints-Haida World Heritage Site

### 1700年代の後半、ハイダ人と白人たちの初期の交易の様子

されていた。これがハイダに大きく影響する。

1787年、スコットランド人のジョージ・ディクソンが、200トンのクイーン・シャーロット号に乗って、ランガラ島南部のクローク湾にやってきた。クイーン・シャーロットというのは当時の英国王ジョージ三世の妃の名前である。ちなみに彼はアメリカの独立を招き、大英帝国のありかたを大きく変えた王として記憶されている。彼の孫娘が大英帝国のピークを築いたとされる、クイーン・ビクトリア（1819-1901）である。

クローク湾でディクソンは多くのハイダ人たちの船に取り囲まれた。かれらは白人たちとの交易に慣れている様子で、手斧やナイフに強い興味を示した。わずか30分でディクソンたちは300枚ものラッコの毛皮を手に入れ1万5000ドルを稼いだとされる。アメリカ連邦銀行の試算によれば1800年当時の1ドルは、現在の14倍の価値だったという。あっさり2000万円ほど稼いだことになるではないか。\* (15)

さてディクソンはその後ハイダ・グワイを巡り、南端の島にセントジェームス岬と命名、ここが島であることを明らかにしたうえで、クイーン・シャーロット島と名付けた。当時のイギリス系の船乗りたちは「キングジョージ・メン」と呼ばれて

いたから、ディクソンからすれば、当然の命名だったであろう。やがてアメリカの独立後は、北西太平洋までやって来る者たちは「ボストン・メン」に切り替わってゆく。\* (12.5)

## 2) カナダ太平洋岸の19世紀

このあと1791～95年に、現在のオレゴンからアラスカに至る北西太平洋をつぶさに探検・測量、地図上に多くを書き込んだのはジョージ・バンクーバーである。河川、海峡、湾や入り江、山々など、現在われわれがこの地域の地図上に見る多くの地名は、ほとんどバンクーバーの命名である。彼はクックの探検にも同行していた。

ヌートカ湾の所有をめぐり、当時のスペインとイギリスが争ったが、1794年にスペインは手を引く。この大きな島の名称もバンクーバー島と確定された。やがて1846年に米加国境が49度線に決められ、以南はアメリカ領になる。1849年に、バンクーバー島がイギリスの植民地に昇格した。1858年にはカナダ本土側も英領コロンビア (British Columbia : BC) 植民地となるが、両者は1866年に合併し首都をビクトリアに置いた。当時製材所などがあつたに過ぎない本土側の港町ギヤスタウンが、バンクーバーという名前になるのは、1886年になってからのことである。ちなみにColumbia というのはColumbus からきている女性擬人名詞、アメリカのことだ。つまり英領コロンビアは英領アメリカと同義である。

1850年代にBC州奥地のカリブー地方やフレイザー河流域でゴールドラッシュが起きた。この地域への玄関口となったビクトリアは一気にブームタウンとなる。そして1871年、BCは生まれたてのカナダに加盟した。当時のカナダは1867年に東部4植民地 (オンタリオ、ケベック、ノバ・スコシア、ニューブランズウィック) が英領自治国として発足したばかり。新たな州としてBCのカナダ参加は、のちの1885年に開通するカナダ太平洋



地図 2

鉄道完成を前提としたものだった。1867年といえ、ちょうど日本の明治維新前夜。この年ロシアはアラスカを、アメリカに売却している (日本の4倍の面積が720万ドルだった)。このあと、プリンスエドワード島、マニトバ、サスカチワン、アルバータなどが順次、各地域への白人たちの移民増加によって、イギリス植民地から離れてカナダに合流していった。大西洋上のニューファウンドランドに至っては、カナダへの参加が1951年、第2次世界大戦のあとになってからである。

さて18世紀後半、アリューシャンからカナダの西海岸にかけ、ゆうに10万匹以上のラッコが生息していたとされるが、中国やヨーロッパで大変高額な取引がなされたラッコの毛皮は、ロシア・イギリス・スペイン三つ巴の、さながら海のゴール

ドラッシュとでもいうべき騒ぎを引き起こした。その結果、あつという間に北西太平洋からラッコたちの姿は消えてしまう。今の言葉で言うなら持続不可能、「旧大陸の欲」があっさりかれらを絶滅の淵に追いやってしまったのである。1911年、ラッコの捕獲が禁止された時点では、生存数わずか1000匹ほどにすぎなかったとされている。<sup>\*</sup> (8)

アメリカを独立で失ったイギリスは、カナダにおける先住民との交易をハドソンベイ・カンパニー (HBC) に拠っていた。この会社は国策会社として「The Government and Adventurers of England into Hudson's Bay」をうたい、1670年に設立された。以後、北極圏から北西太平洋岸に至る広い範囲に多くの探検家を送り出し、交易や植民の範囲を広げつつ、1793年にはマッケンジーが陸路ようやく太平洋岸にまで到達する。

先住民との交易にさまざまな経験を重ねてきたHBCは、先住民との良好な交易と酒は決して両立しないことを学んでいた。しかしボストン・メンはおかまいなく交易に酒を持ち込み、かなり荒っぽいことを平気でやったし、ハイダからも「節操のない輩」として軽蔑されたという。

K・ダルツェルは後に掲げた本の中で、典型的なボストン・メン、ケンドリック船長などがやったことを書いている。1791年、90トンのレディ・ワシントンに乗ってスカン・グワイに現れたケンドリックは、勇猛なチーフだったコヤとの間で紛争を引き起こした。一方は銃で武装、もう一方はカヌーを操っての戦い。ほとんど一方的な殺戮と言っていい戦いとなって、コヤの妻や子供を含むハイダが1日で60人も殺された。当時の野卑で傲慢な白人たちが、北米の先住民に対してどんな対応をしていたかがよくわかるシーンだ。<sup>\*</sup> (6,17)

1834年にHBCは先住民との交易のために、ハイダ・グワイのカナダ側対岸、現在プリンス・ルパートがあるすぐ北にシンプソン岬を、1843年に

バンクーバー島南端にも交易所を置き (現ビクトリア)、1870年にはマセットにも交易所を開設した。

このような激しい動きの19世紀前半の中で、ラッコの毛皮を失ったハイダ人たちは、テン、ビーバーなど他の毛皮交易に手を広げてゆく。だが、とくにハイダの若者たちは新興ビクトリアなどのけばけばしさや、酒などの誘惑に抗しきれない。いかがわしく派手にふるまうペテン師や売春業者などに、いいように食べ物にされる者が多かったらしい。ハイダ・グワイにおいても、わずかながら銅や金鉱などが掘られ、白人たちはかまわずハイダの領分に侵入した。ハイダ人の多くが、これらの人足や運送関係に身をやつし、独自の生活環境から引き離されるようになった。ながく独自の生活環境に浸ってきたハイダは、運命的とでもいう北米大陸の歴史の中に引き込まれてゆく。<sup>\*</sup> (16)

### 3) 天然痘の打撃、白人の侵入

1862年、ビクトリアからハイダ・グワイに帰った1人の若者が、天然痘に罹患していた。それまでもすでに、結核や風邪、はしかなど、旧大陸からの病気免疫力がなかったハイダの人口減少は進んでいたが、翌63年に広がった天然痘の爆発的流行は恐るべきものだった。以後わずか10年間ほどのうちに、ハイダの人口は600人ほどまでに激減したという。白人たちとの接触以前には1万とも2万人と称されることがある人口の、じつに9割以上が一瞬のうちに消えたのである。これに似た現象は北隣のクリンギット、エスキモーや新大陸各地、南太平洋の島嶼地域で多くひき起こされている。北西太平洋カナダの、ほぼ1万年以上にわたって旧世界との交流が一切なかった、最もユニークとされるハイダ文明が、一夜のうちに危機に瀕した (ダルツェルは1840年のハイダ・グワイの人口について、7000人という数字を紹介している)。



ビクトリア州立博物館の置かれている  
ハイダのポール群

各集落の人々は激しい人口減に耐えきれず、いくつかの集落に居を移しながら20世紀を迎えた。病原菌に加え、ハイダ人にとって痛かったのはキリスト教の伝道師たちと、カナダ政府の干渉、「同化政策」である。伝道師たちの活動は、ハイダの族長たちの若者に対する影響力を弱める結果にもなった。カナダ政府はハイダの重要な儀式などを野蛮として禁じた。宣教師団はハイダの子供たちを「正しい教育のため」として親元から強制的に引き離し、彼らのミッション・スクールに入れた。親たちの抗議は警察権力によって封じられたというから、人権無視どころのさわぎではない。白人によるハイダへのおせっかいな人権無視は、1880年代から1970年代まで続けられたのである。もちろん隔離された子供たちの大半は、学校を出てのちハイダ・グワイに戻ることなく、BC州各地やアメリカ北西部にまで流れて行った。<sup>\* (6)</sup> さらに、これら学校の寮などにおける、宣教師や教員たちによる子供たちへの虐待や性的暴力が告発され、カナダ政府はつい最近（2008年）になって、公式な謝罪と補償に応じたばかりである。同化政策といえは多少はマシにきこえるかもしれない。しかし、北米大陸における実質的な先住民絶滅政策は言語を絶するすさまじさである。<sup>\* (18)</sup>

1882年から政府はハイダ人にお構いなく、森林

の伐採権や鉱山の採掘権を、白人たちなどに発行し始める。こうしたなかで、1910年代には日本人による銅鉱山（モースビー島南部 Ikeda Cove）が、数少ない成功例として記録されている。ローズハーバーの捕鯨基地（Consolidated Whaling Corp Ltd. など）でも日本人が働いていた。前者は数年で、後者は1943年までに1182頭のクジラを解体したのち閉鎖された。現在ローズハーバーは、グワイ・ハーナス国立公園内における唯一の民宿が、1978年以来スーザンとゴーツの手によって経営されている。

またさきの Ikeda Cave 近くには「タニヨ・イソザキ」という日本人女性のお墓が、苔に埋もれながら残っている。やはり当時ここにあったアワビの缶詰工場で働いていた人だという。1913年10月21日、30歳で亡くなったと墓標にあった。

伝統的な生活の場と様式との双方から切り離されたハイダは、スキッドゲートとマセットに集まったが、木材の伐採、漁夫、本土側の工夫などを主な仕事として、20世紀前半を耐える。BC州政府はクイーン・シャーロット島を、農業に最適な「無人の地として」タダ同然で（1エーカー＝1200坪＝1ドル）売出し、入植を北米全体にまで呼びかけた。第1次世界大戦前にはかなりの人々が入植したが、戦争後は島から離れるものも多く、荒野に帰ったグラハム島北部は、現在広大な州立公園になっている。

こうしたなかで病原菌を乗り越えたハイダは、第2次世界大戦の20世紀中ごろまでに、ハイダ・グワイで1500人、カナダ各地に2000人ほどと、ようやく人口の回復が見られるようになった。<sup>\* (8)</sup>

#### 4) ハイダ・ルネッサンス

こうした流れの中に登場するのが、ハイダ再興の基を築いたとされる彫刻家、ビル・リード（Bill Reid、ハイダ名 Iljuwas Yalth Sgwansang、



「ワタリガラスと最初の人々」(ビル・リード作,  
BC 州立大学考古学博物館)

1920-98)だ。現代カナダを代表する、世界的芸術家の1人である。彼は1920年生まれ、父がスコットランド系白人、母がハイダ人、ビクトリアで育った。1943年になってはじめて母親の故郷であるスキッドゲートに行き、祖父からハイダ彫刻の手ほどきを受ける。祖父はハイダの彫刻家として名高いチャールズ・イーデンショーから多くを学んでいた。やがてトロントやバンクーバーで研鑽を重ねたリードは、1949年、BC州立大学(UBC)のトーテムポールパーク設営にかかわる。やはりカナダ北西部出身で先住民彫刻家として知られる、マンゴー・マーティンや彼の弟子であるダグラス・クランマーからも多くを学んだ。1959年には同大学内のハイダ村再建計画に参画、62年に完成した。彼の代表作はUBCの考古学博物館にある「ワタリガラスと最初の人々」、バンクーバー国際空港ロビーに展示されている「ジェード・カヌー」、スキッドゲートの部族会議場前に建てられた、高さ18メートルもの「メモリアルポール」などがある。まさにハイダのルネッサンスともいえるべき、あらたな潮流を先導したといっていだろう。

彼に続き、弟子のロバート・デービッドソン、エド・ロス、パット・ディクソン、アルフレッド・コリンソンなどの俊秀が彫刻芸術やプリント

などの分野で活躍、かれらはいずれも「ハイダの誇り」を呼び覚ましつつ、今世紀にまでその伝統をつないでいる。\*<sup>(1)</sup>

## 2. ハイダの自然と文化

「我われの文化や伝統は、陸と海に対する我々の尊敬であり、親しみの証しである。さながら森の木のように人々の根は絡み合い、いかなる困難にも負けることはない。我われはハイダ・グワイに拠って立つ。この地に我々の祖先は生き、死んでいった。我われもまた、いつの日か彼らに呼ばれるまで、ここに居を構え、暮らす。そして今生きている我われは、自分たちの遺産を未来の子孫に引き継ぐ責任を負っている」。——ハイダ憲法序文から\*<sup>(8)</sup>(訳は小林)

### 1) 自然から与えられる「利子」だけの生活

ハイダの人々の暮らしは全く自然と一体であり、何千年の間、自然に溶け込んで暮らしてきた。地球上あらゆる地域の「先住民」に共通することなのだが、今の人類が言い出したエコロジーというのは、100パーセント、彼らのライフスタイルを表すものにほかならない。自然の恵みを少しずついただき、必要以上に蓄えることはしない。地面を深く掘り返し、再利用不可能な始末にすることはしない。土地の私的所有などということは考えたこともなかった。人を自然界の頂点に置くという驕りもない。すべてを再生可能な形で土に返してゆく。必要最小限の消費で感謝しつつ生きてゆく。まさに自然がもたらしてくれる「利子」だけの生活。「元」に手を付けることを絶対にしない。すべからく持続可能であり、再生可能な暮らしぶりなのである。

文字を持たない彼らの歴史は、口伝でに継承され、命脈を保ってきた。自然のなかにあって彼ら

は他の動物や鳥たちを、人間と同列に考えてきた。あるいはおおいなる自然のなかで人間の方が彼らの子孫だと考えてもきた。そもそも人間がこの世にあらわれたのは、グラハム島北西の浜辺で、ワタリガラスが蛤の貝の中から、人間たちを引っ張り出して育てたからだとされている。この物語を形にしたのが、先述のビル・リードによる「ワタリガラスと最初の人びと」だ。ハイダの人々は、ワタリガラスかワシの系列、どちらかに属している。この系列同士の中における婚姻は許されない母系社会である。さらに2つの系列の中から、熊、狼、シャチ、ラッコ、ハヤブサなどをモチーフとする副次部族・系列ができてきた。

ハイダの集落にある主だった家々の前の建てられている柱には、こうした部族の歴史がすべて刻み込まれている。原始の精霊信仰、動物を祭るアニミズムとは異なり、系統と血統、権利、歴史、部族の紋章などがさまざまな様式で刻まれた集落の守護神でもある。だからこのような柱を、たんなる動物信仰の象徴であるトーテムポールと呼ぶのは正しくない、とハイダの文化は主張する。とくに、人間をすべての頂点とみなすキリスト教的価値観からすると、ハイダなどあらゆる先住民がもつこのような信仰や価値観は、「未開社会」ゆえという蔑視の対象となりがちなのだが、なんらさしたる根拠はない。



スカン・グワイに残されているポールの数々

## 2) さまざまな記憶を刻み込んだ柱

海で亡くなったり、ハイダ・グワイ以外の地で亡くなり、身体が戻ってこない人を記念するポール (Memorial Pole) がある。本来なら、ハイダの身体はハイダ・グワイの土に還らなくてはならない。柱の下部にはその家の紋章が刻まれ、トップにはワタリガラスかワシのどちらか。中間には彼がつかさどったポトラッチの数だけリングが刻まれる。ポトラッチというのは、地位の高い族長などが催す大宴会のことだ。結婚式、葬儀、代替わり、そのほかの大切な儀式には必ずポトラッチが開催され、多くの人が招かれた。贈り物などの施しも盛大に行われる。部族内における、一種の富の再配分という機能をもっていたとされるが、偉大な族長ほどこの回数が多い。こうした儀式さえ、19世紀末には白人の政府により禁止命令が出された。

病原菌という想像もしなかった大災害のあと、白人政府による強引な諸政策でハイダ・グワイの地から出て行くことを余儀なくされたり、自由な土地の活用を封じられ、それまでとは全く異なる生活様式を強いられたハイダの人々の、プライドを込めた強い思いが、先に紹介したハイダ憲法序文に如実に書かれている。

霊安追悼のための柱 (Mortuary Pole) もある。族長など地位の高い人が亡くなると、死体はスギ板でつくられた箱に納められる。しばらく家に安置されたのち、この箱は集落前に立てられた霊安柱の上部に収められることになっている。後継者は先代の死後2年以内にこのポールを立て、ポトラッチを行わなくてはならない。

何家族もが一緒に生活していた大家屋、ロングハウスの前面に立てられるのが Frontal Pole である。ワタリガラスかワシのメイン系統を象徴する彫刻を冠として、部族の歴史を表す様々なサブシンボルの動物、人の姿かたちが、太い一本のスギの上から下にまで重ねられ、雄渾に彫り込まれて

いる。19世紀末以降、ハイダの地から持ち去られたもののほとんどがこれである。

ロングハウス中央奥、チーフの座の背後を飾る大黒柱ともいべき Interior Pole など、俗にトームポールと一括される柱は一様ではなく、同じものは1つとしてない。

19世紀後半の病気の急襲は、こうした伝統の継承をほとんど不可能にしてしまったし、白人たちによる差別や蔑視もまた、ハイダの誇りを奪うに十分だった。そして無人化した各集落からは、その地に眠る人々の霊や部族の想い、伝統など一切が無視されたまま、これらのポールは引き抜かれ、あるいは主だった紋章部分が輪切りにされるなどして、家々に残された記念品や貴重な家具や道具や装飾品共々、全く勝手に持ち去られてしまったのである。

グワイ・ハーナス国立公園内の世界遺産、スカン・グワイから持ち去られた最大のポールが、ロンドンの大英博物館に据えられている。ハイダ・グワイのスキッドゲート、あるいはマセットにあるハイダの博物館などへの、各集落から無断で持ち出された柱や記念物の返還が広く呼びかけられている。<sup>\*</sup> (2, 8, 11)

### 3) ハイダの命、スギの木

こうした柱は、どのみち朽ちてしまうのだから、わざわざ返す必要はないと考えられるかもしれない。しかしハイダの人々は、柔らかなスギで作られたいろいろな柱が、やがて朽ち、苔に覆われ、ゆっくり土に還ってゆくのを見つめながら、祖先の記憶を呼び覚ましてきた。何千年もの間、こうしたことが繰り返されてきたのである。西欧文明との遭遇以後も、かれらのスピリットの中にはこの習慣や伝統が生き続けている。

ハイダの人々はハイダ・クワイの豊富な食料に恵まれてきた。森にはベリーやきのこなどがいくらかでもあり、海からは貝類、多くの魚がたやすく



分厚く苔をまとった木々  
(グワイ・ハーナス国立公園)

手に入った。もちろんたくさんの鳥類と動物もいる。秋になると川にはサケがあふれた。

それゆえ冬になると、男たちはポールを刻み、家具調度品をつくり、家を建てた。女たちはスギの皮を加工し、敷布や布、衣類、籠、紐、箱など、いろいろな生活用品を作り出す時間が十分にあった。各部族や家系の紋章 (Crest) に見る雄渾な、あるいは美しくユニークなデザインは、より洗練されつつ、世界中から高い評価を受けている。衣装にほどこされる模様もまた然り。ハイダの人々が生み出す芸術性の高さは、このように豊富な食料に恵まれ、創造性を発揮できる時間的なゆとりが十分確保されたからだとみられている。

ハイダ・グワイの森を形成し、ハイダの人々の生活を支えてきたのは、トウヒ (Sitka Spruce)、ツガ (Western Hemlock)、スギあるいはヒバ (Red Cedar) という3種類の針葉樹である。通年寒冷ではあってもめったに凍らないハイダ・グワイの森には、樹齢1000年というこれらの巨木が育った。トウヒは高さ90メートルにまで大きくなる。苔をまとい、ごつごつした表皮をもちつつ太さは数メートルに達する。中でもスギはハイダの人々の命といってもいい大切な木である。柔らかく、まっすぐで油脂分の多いスギの木は、ハイダの家、ポール、全長15メートルにもなる大型カヌ

ーを作り出すことができる。この皮をはぎ、柔らかくもみほぐすと、衣類などの生活必需品にたやすく生まれ変わってくれる。さらに落葉樹としてはハンノキ (Red Alder) が生い茂っている。窒素を多く固定し、ハイダ・グワイのエコシステム全体に、豊かな栄養分を送り込んでいるのである。\* (8)

### 3. グワイ・ハーナス国立公園の成立

ハイダ・グワイにおける主な産業は現在も林業である。しかし、ハイダの文化をはぐくんできた大切な森林が皆伐され、どんどんなくなってゆくのを何とか食い止めなくては、という人々の思いもまた強い。

1974年になって、こうした人々の運動がモースビー島で始まった。しかし実際には、林業によって生計を立てているハイダ人も少なくない。ハイダ人の中でも対立が生じがちだった。さらに、ウェスタン・フォレスト・プロダクツとか、マクミラン・ブローデル社など、大規模木材会社の政治力には、ハイダの人々の抗議は届かない。チェーンソーの力が圧倒的だったのである。しかし80年代になると、世界各地における自然保護運動や、エ

コロジ－重視の風潮が、ハイダの追い風にもなってきた。

1981年、モースビー島南端近くのアンソニー島 (現スカン・グワイ) が国定史跡となり、世界文化遺産にも登録された。これがきっかけとなって、ハイダの自然や文化に対する一般のカナダ人の関心が高まり、ハイダの人々を大きく元気づけることとなった。

1985年には、ハイダの平和なライフスタイルをこれ以上破壊するなという主張のもとに、スキッドゲートやウィンディ・ベイ (ハイダ名では、ルッキヤ・ガウガ=ハヤブサ湾) ではハイダの人々のデモが行われ、ピケまでが張られたりした。こうした動きが国際的な関心を、このカナダ北西太平洋の島に引き寄せた。

そして1987年、ようやく BC 州政府とカナダ政府は、モースビー島南部における木材の伐採禁止を決定、木材会社に対して補償金を支払い、モースビー島南部全域1475平方キロ、南北およそ90キロを、グワイ・ハーナス国立公園ならびに特別保護区に指定した (南モースビー協定)。カナダ先住民のハイダとカナダ政府が共同で管理するという、きわめてユニークな公園経営のしかたも、同時に決められた。\* (3.4.8)

カナダ政府とハイダ・ネーションは“Archipelago Management Board”，ハイダ諸島経営会議 (AMB) を設置し、国立公園の管理・経営を行うことに合意したのである。この会議に参画するのは、カナダ政府側を代表して国立公園管理局 (Parks Canada)、ならびに国立漁業海洋管理局 (Fisheries and Oceans Canada)。ハイダ側を代表するのは世界遺産委員会 (Haida Heritage Site) である。ハイダの主張が十分に認められるのかどうかははっきりしない部分はあるものの、彼らにとって AMB の存在は、以前に比べ相当おおきな変化であり、前進であることに疑いない。

グワイ・ハーナスの公園管理を特徴づけている



モースビー島北部、国立公園外における  
材木伐採現場、皆伐の様子



グワイ・ハーナスへの出発地点、  
モースビー・キャンプの波止場

手法の1つに Watchmen Program がある。これはかつてハイダの集落があった5カ所（スケダンス、タヌー、ルッキヤ・ガウガ、ホットスプリングス、スカン・グワイ）に、ハイダの公園管理官2～4名を常駐させ、公園の管理維持、観光客へのインタープリテーション、海難救助支援、悪天候時の避難場所提供、などを行うというものである。かつてハイダの集落には外敵などに備えた見張り役が配置されていたが、新しい公園のウォッチマンは昔のそれより責任が重い。公園内を旅行する人たちは、各地のウォッチマンから各集落におけるハイダにつき、さまざまな物語を聞くことができる。ただし、ウォッチマン・キャンプのある場所での、旅行者のキャンプは認められてはいない。

AMBは2010年、グワイ・ハーナスの周辺海域10キロ圏内を海洋保護区に指定した。これによってグワイ・ハーナスは、世界でも類を見ない陸と海一体型の、5000平方キロに及ぶ国立公園となった。そして2013年8月15日、グワイ・ハーナス25周年を記念し、ルッキヤ・ガウガに13メートルの遺産記念ポールが立てられた。多くの人々、政治家や文化人がここに集まり、ハイダの文化とカナダという国家が抱える多様性を祝ったことは、ハイダの人々に新たな自信とプライドを与えたに違



8人も乗ればいっぱいになるサイズの  
ゾディアックボート

いない。グワイ・ハーナス内における、実に130年ぶりとなる歴史的できごとだった。<sup>\*(3.7.8)</sup>

#### 4. 公園の経営管理とハイダの主権

グワイ・ハーナス国立公園へのアプローチはらくではない。モースビー島北部のモースビー・キャンプまでしか道路が通じていないため、ほとんどの旅行者はここから現地観光業者が運行する小型船（ゾディアックかヨットなど）のツアーに参加する。カヤックのツアー、あるいは個人のカヌーイストなども、貸カヌーなどでここから出発することが多い。

また出発前に、必ずスキッドゲートかサンドスピットの公園管理局で、1時間半ほどの事前レクチャーを受けなくてはならない。個人の旅行者には、旅行許可証（Trip permit）が発行される。とくにカヌーイストに対しては、安全上の配慮も含めて細かな指示がなされている。天候や波、海流に関する注意、緊急連絡方法その他。一般のツアーに参加する場合は、観光業者に同様の説明義務が課されているため、受講は免除されている。

さらに、グワイ・ハーナスには厳格な入場人数規制が敷かれている。公園に入ることができるの

は1日200人である。1ツアーは12人まで。そして1年間の延べ入園者数は3万3000人。1人あたり平均3泊すると1万1000人しか入場できない。

しかも、3万3000人の内訳は、個人でやってくる旅行者（カヌーやヨットなど）用に3分の1、ハイダ系の観光業者用に3分の1、そして一般の観光業者用に3分の1が割り振られている。グワイ・ハーナスがもともとハイダの土地だったことから、ここでの営業権にも、ハイダへの配慮がなされているのである。

AMBは2015年に総合経営計画を見直す。公園利用状況、エコシステムのモニタリング、計画や指標など、文化、エコロジー、社会や経済、漁業、ツーリズムなどがハイダ・グワイとうまくマッチするよう、再検討するためである。オイルやガスなどの発掘はもちろん認められていない。海洋漁業についてもさまざまな制限が設けられている。1970年代にはアワビが絶滅の危機に瀕した。ラッコがいなくなって以後、ラッコの好んだウニの数が爆発的に増えた。ウニはケルプという茶褐色の大型海藻を減らしてしまう。海中にあるケルプの林は、魚たち海中生物の大切な生息空間になっている。ケルプにニシンが卵を産みつけたものが、子持ち昆布となって日本にもやってくる。陸のエコシステム同様、海のエコシステムを守ることも、AMBの重要な役割になっている。<sup>\*</sup> (7)

### 1) グワイ・ハーナス国立公園への入場者

ではグワイ・ハーナスへの入場者数をみてみよう。

ちょっと数字は古いのだが、2008年度の入場者数1970人、8100泊。

10年前の1998年を見ると、2005人、1万516泊となっている。

人数が一番多かったのは2004年、2155人だが泊数は9572泊だった。

現状でツアー客はおよそ1000人、平均4.5泊、

トータル4500泊/人

カヌーイストなど個人客が500人、平均7泊、トータル3700泊/人

1996年には平均滞在日数が7.5泊あったが、2008年は4.4泊まで短くなっている。

1997年には全体の47パーセントが個人のカヌー客だったが、2007年にはこれが26パーセントに下がった。

日帰り客や3～4泊の短期滞在が増えていること、若年層のアウトドアタイプから、中高年のソフトアドベンチャータイプへと、近年の客層がシフトしている傾向が読み取れる。

全体の入込数は、最近10年で見る限り漸減傾向にあるようだ。

### 2) 観光業者と取扱人数

グワイ・ハーナスで観光業の営業許可を得ているのは、2013年現在29社である。このうち主な業者の数は10社ほどにすぎない。内訳をみると、カヤックのガイドや、カヌーレンタルをほぼそやっている個人業者もけっこうある。小型水上機のチャーター業者は2社、カヤックのツアー業者が12社、小型ヨットでツアーを行なっているところが9社、エンジン付きのゾディアックツアー等を行うのが8社など。複数のサービスを行い、営業的に十分な軌道に乗せられているところはそう多くないようだ。どの業者も規模は小さく、公園内の宿泊施設は2カ所、いずれも定員は20名がせいぜいである。

ツアーにしても、1ツアーの定員は12名に制限されている。上陸地点やキャンプ地点の自然に対するインパクトを少なくし、分散させるためである。観光業者は毎シーズン、取扱予定人数をAMBに自己申告する。実際の取扱人数も報告しなくてはならない決まりだ。そして3年から5年の実績平均が予定人数の5割を下回るようなら、取扱割り当て人数は半分に減らされる、という決

まりになっている。この割り当て人数 (Quota) を、業者間で融通し合うことはできない。使いきれなかった枠はそのまま AMB に返却する。ほとんどの業者が、保有ボート数も 1~2 台、ツアーシーズンが 6 月から 9 月の実質 100 日間ほどであり、営業期間がほとんど夏季に限定されることなどから、先述の年間 3 万 3000 人というキャパシティにはまだまだ十分なゆとりがある。\* (7)

いずれにせよ、このようなツーリズムの現状からも、グワイ・ハーナスはカナダの国立公園の中でも秘境中の秘境ということ言えるようだ。

### 3) 国立公園管理規定

AMB が決めているグワイ・ハーナス国立公園の管理規定をみてみよう。まず禁止事項は、①公園内の自然や動物すべてに手を触れたり、持ち出すこと ②猟やわなを仕掛けること ③川や湖での釣り ④銃砲の持ち込み ⑤洞窟に入ること ⑥森の中で火をたくこと (キャンプファイヤーなど) ⑦文化財に手を触れてはならない、などが挙げられている。園内全体が考古学上の保護管理も徹底しているため、⑤はハイダの遺跡や遺骨に関するものだし、⑦はハイダ集落、あるいは 18 世紀以降の遺跡などが、森の中などあちこちに苔に覆われながら放置されていたりするからである。さ



つい最近まで営業していた製材所跡が苔に埋もれつつある

らに当たり前のことなのだが、ゴミを散らかさないように、とくにプラスチック類の持ち帰りは強く指示されている。

この国立公園の一番の特徴は、トイレがないことである。基本思想は「人間の排泄物も、動物の排泄物も、ともに自然に返す」という、有機循環系の考え方を実行しているのである。これは先の入場人数や、もとのハイダの自然との付き合い方が大きく影響しているものと考えられるのだが、先にみたように、若いアウトドア志向のキャンパー・カヌーイストなどが減少しつつあること、中高年の客層が増えつつあることなどを考えると、今後検討の余地があるポイントかと思われる。\* (3,8)

### 4) キャンプ上の規則

- ①火をたくのは海岸の満ち潮ライン以下のエリアで。灰を砂とかき混ぜてはならない。潮が満ちてくると自然に灰などは海水が洗い流してくれるからである。
- ②1カ所にキャンプしたり上陸したりできる人数は、12人まで。
- ③公園内はすべて考古学上の研究対象となっているので、地面を掘ってはならない。
- ④化学洗剤は使用しないこと。油を洗い落とすのはビーチの砂を使えばいい。
- ⑤排便は波打ち際で。理由は①と同じ。やむを得ず森の中で行う場合は、川から 100メートル以上離れて 20センチ以上の穴を掘って行き、埋める。いずれもあとはバクテリアなどが自然の中に返してくれるであろう。紙や生理用品は必ず持ち帰ること。
- ⑥海に物を捨てないこと。ただし食べ残しは海へ。自然が処理してくれる。食べ残しを地面に埋めるのは不可。熊が掘り返すことがあり、あとのキャンパーにも危険である。
- ⑦流木などをキャンプ用に集めたら、使用後元の

場所に返しておくこと。

- ⑧キャンプのあと、細かなゴミなども一切残さないように回収すること。
- ⑨キャンプの食糧管理をしっかりすること。高さ5メートル以上、幹から1.5メートル以上離れた木の枝に、ロープで食料を吊るす（ベア・プルーフ）。また8月以降、サケが遡上する時期には、河口付近でのキャンプは避けるように（これも熊対策）。

### 5) グワイ・ハーナスの入園料

グワイ・ハーナスの入園料はカナダ一般の国立公園に比べ倍ほど高額に設定されている。

個人の入場料は1日19.60ドル。シーズンパスは117.70ドル。このほか子供料金や高齢者割引、家族用など小グループ用割引が用意されている。たとえば、大人2人と子供（17歳以下）5人まで計7人以内のグループだと、1日49ドル、シーズンパスは294.40ドルなど、けっこうきめが細かい。こういったシステムは、日本の世界遺産地域でもぜひ検討する必要があるのではないか。

## 5. グワイ・ハーナスの観光ツアー

バンクーバーからプロペラ機 DASH8-300で1時間半、ハイダ・グワイの南島ともいべきモースビー北東角にあるサンドスピット空港に着く。空港周辺には民宿が軒軒と、観光業者のオフィスが少し。空港ビルの一部に観光案内所がある。目の前のスキッドゲート海峡の向こうに人口700人ほどのスキッドゲートの町があり、ここへはフェリーで渡る。ハイダ・グワイ博物館を見逃してはならない。

サンドスピット界隈ではたまに車が通るだけで、人通りはほとんどない。海岸べりの道路わきにまばらに木が立っていて、枝に白頭ワシがとまって



国立公園内をカヤックがのんびり進んで行った

いたりする。動物の王国とされるハイダ・グワイでは、陸の象徴が黒熊、海の象徴がシャチ、空の象徴がワシである。白頭ワシの巣もよくみられるが、高い針葉樹の上につくられた彼らの巣は、時に重さが900キロに達するという。

ハイダの黒熊は人間の親戚と思われてきた。かれらは川で捕まえたサケを啜えて森に運び、木の下で食べたりもする。川の流れから150メートルもの範囲に及ぶらしい。平均すると1頭の熊は、一生のうちに700匹ものサケを森に運ぶ。この食い残しが、ハイダ・グワイの森を養う。その重量合計は1.6トンにもなるというから、ハイダの海と森多くの熊たちによっても結び付けられているのである。エコロジーのシステムは、実に巧妙にできている。

### 1) 樹齢1000年、ツガの大木

モースビー・キャンプから出発するポート乗り場のすぐ後ろに、標高1148メートルのモースビー山がそびえている。ハイダ・グワイの最高峰である。ツアーのゾディアックボートには多くても10人ほどしか客は乗れない。最高時速は70キロほど。普通はこれで3泊4日の国立公園内ツアーを行う。観光客のハイダ・グワイ平均滞在日数が4.5泊というのは、ツアーをはさんで前後2～3泊をサン

ドスピットあるいはスキッドゲート、マセットなどに宿泊するパターンになっていると見ていいだろう。

ツアーは午前と午後、数カ所の上陸観光を行う。ボートのドライバーが自然や文化の解説役をかねている。もちろん彼はランチやティータイムのクッキングも担当する。上陸ポイントは昔の製材所跡だったり、ハイダの集落跡、鉦山があったところなど。いずれも海岸からわずか入っただけで、ふとしたところから迷子になってしまいそうな、深い森のなかにある。そして例外なくお厚い苔におおわれている。木々の枝もふかふかの苔で覆われているだけではなく、サルオガセなどが老人のひげ状に垂れ下がっており、まったくものすごいとしか言いようがない。

しかし実際には、1960年代になっても依然さまざまな経済活動が続けられていた。数百人が暮らした集落には商店も小さいながらホテルもあったし、鉄鉦山までの道路やケーブルが設置されていたというから、現状の森林からは想像もつかない世界である。

ハイダ集落跡では、かつて（あるいは今も）ウィンディ・ベイと呼ばれていたルッキヤ・ガウガの人気の高い。ウォッチマン・キャンプの背後には、らくに一周できるハイキングコースがつくら



ルッキヤ・ガウガ（ウィンディ・ベイ）に浮かべられていたハイダのカヌー



ルッキヤ・ガウガに立てられたばかりのメモリアルポール、奥の建物はウォッチマン・キャンプ

れているし、集落跡の規模も大きい。たくさんのサケが遡上するウィンディ・ベイ・クリーク河口に位置していて、トレイルを10分ほど歩いてゆくと、樹齢1000年ほどというツガの大木がある。根元の直径は5メートルもあるだろうか。かつてはこのくらいの大木が、あたり一面に生い茂っていた。だから1970年代以降ハイダの人々は、チェーンソーや皆伐からこれを守ろうとして身体を張って来たとし、そのおかげでわずかながらも、こうした巨木が現在に生き残った。屋久島も含め、世界の各地で同様のストーリーに事欠かない。まったく、森を失った文明は滅びてしまうのである。海もまた同じであるに違いない。やがてこのような大木には、「ハヤブサの神」みたいな固有名詞がふられるのではないかと。先にも書いたが、ルッキヤはハヤブサのことである。

## 2) 地震で止まった温泉

ハイダ・グワイは太平洋火山帯の上ののっている。それでこの辺りにも温泉がでる。ハイダはこの島を「ギヤンドル・クーイン・グワイ・ヤーイ」と呼ぶ。文字どおり温泉島。このあたりには26カ所も温泉が噴き出していて、観光客にもグワイ・ハーナス一番の人気スポットだった。海を眺めながら、のんびり温泉につかることができるか

らである。次項に出てくるイケダ氏が、およそ100年前ここにキャビンを建て、当時の鉱山労働者や木材伐採人夫たちにも自由に使わせたという。ここは戦後まで、時に行列ができるほどの人気「湯治場」だった。今はもう建物など何も残されていない。<sup>\*</sup> (6)

つい最近の2012年10月27日、ハイダ・グワイ沖すぐの太平洋沖で、マグニチュード7.7という大地震が起き、これらの温泉湧出が止まった。われわれは未練たっぷりにこの島を眺めやりつつ、上陸を諦めたという次第。ちなみにハイダ・グワイの記録によると、1949年にマグニチュード9.1という超大型地震が起きている。2011年3月の東北を上回る規模で、こうなると地球自然の振る舞いは、人間の力の及ぶところでは到底ない。さっさと逃げるしかないし、金があるからといったところで、これに対する巨大堤防など無駄な抵抗でしかない。もちろんハイダ・グワイにも、カナダ太平洋岸のどこにもそんな公共投資は全くなされていないが、サンドスピット界限では「TSUNAMIに注意」の標識を頻繁に目にした。ところでこの温泉はいつ復活するか。それも当分様子を見るしかない、我われのガイドは肩をすぼめた。

グワイ・ハーナスではトドやアザラシの群棲も見る。20世紀初頭から1970年に法律で捕獲が禁止



ローズハーバーのゲストハウスの前で出発の準備  
(グワイ・ハーナス)

されるまで、毛皮やサケの数を守るという口実のもとに、BCだけで5万5000頭のトドが殺され、残存4000にまで減少した。アザラシ類は50万頭が殺され、10パーセントが生き残った。現在のかれらの生存数は、4500頭と9500頭、やや回復基調にあるといったところであろうか。オスのトドは800キロの体重で通常10頭から15頭のメスを従えている。<sup>\*</sup> (8)

### 3) 鯨のブリーチング

カナダの太平洋岸からアラスカにかけては、氷河時代がつくった細い海峡や入り江、瀬戸、湾などが複雑に入り組んでいる。バンクーバー島と本土の間のジョージア海峡、その北のクイーン・シャーロット海峡、あるいはハイダ・グワイと本土の間に横たわるヘカテ瀬戸などは、メキシコ沖からアラスカの海を往復する鯨たちのゴールドルートである。イルカやシャチ（オルカ）を始めとする26種類もの鯨たちが、1万5000キロから2万キロ、冬に南の海で子を産み、夏は北の海でエサを詰め込むため、これらのルートを往復するのである。森が海をはぐくむから、海岸線近くの方がエサも豊富だ。というわけで、我われのボートの近くにも、毎日鯨が出現する。人気はもちろんザトウクジラで、かれらの豪快なブリーチングが目前で演じられた。グワイ・ハーナス観光の目玉のひとつがこれである。

ここにおけるホエールウォッチングのルールは、①鯨から400メートル以内の船速は7ノット以下、②鯨の進行方向をさえぎるな、③接近は100メートルまで、④100メートル以内のボートは停止を、⑤鯨に前後から近づかないよう並行せよ、⑥岸に近い時は沖側に回ること、⑦同じ個体の観察は30分以内、⑧泳いだりエサを与えたりしない、⑩空からは300メートル以内に接近しないこと。

グワイ・ハーナス全域はまるで人跡未踏のようにも見える。森と海と空しかない。風がなければ

全く沈黙の世界。たまに鳥の声が聞こえる。しかしゾディアックから浜に上陸し、ガイドのあとをついて森を進むと、大きな製材所のあとの機械類が錆び付き、苔の下で朽ち果てそうになっていたり、ビンや缶、作業用だったであろう革靴の片割れなどが苔に埋もれている。つい最近までの人跡があちこちに立ち現われてくるのだ。19世紀初頭にはこんなところまで、日本人が来て働いていた。Ikeda Cove という固有名詞が今も地図にのっている。その銅鉱山は1906年開業、1920年閉山になったが、最盛期は118人も日本人などが働いていた。会社名は Ikeda Bay Company だったと、ガイドが教えてくれた。14年間でも、当時公害を引き起こしたりしなかったのだろうか、気にならないではない。

Ikeda Cove のすぐ北側に先にふれた日本人女性のお墓がある。バンクーバーからか、ビクトリアからか、この地のアワビ缶詰工場にまで来て働き、病をえた磯崎タニヨさんは、亡くなる前何を思ったであろうかと、深い森の中を歩きながら考えた。アワビはすぐにとれなくなり、この工場は1917年まで塩をつくったが、まもなく閉鎖されたという。

Ikeda Bay あるいは Ikeda Cove と、北側のハリエット・ハーバー周辺の Jedway では、19世紀



グワイ・ハーンズの森でガイドの説明を聞く

半ば以降繰り返し鉱山ブームが起きている。1966年の記録ではこの鉄鉱山に278人が働いていたし、島の西海岸タス湾には同じく鉄鉱山があり、1000人もの人たちが働いていた。山の中腹から上が露天掘りによって大きく削り取られ、無残なむき出しになったままなのが、遠くからでも見てとれる。現在のハイダ・グワイ最大の町クィーン・シャーロット市の人口がようやく940人である。わずか半世紀前のこのあたりの賑やかさが、なかなか想像しにくい。\* (6)

#### 4) ビル・リードの墓

トゥアヌー・ウルナガイという廃村跡に寄った。トゥアヌーは甘藷（アマモ）、ウルナガイは村。地図には Tanu とだけある。付近にアマモがよくしげる浅瀬があった。アマモは日本では肥料や布団に使ったし、海水を注いで乾燥させ、焼いた灰から塩を精製したと辞書にある。藻塩草ともいう。このウォッチマンはウーマンのキャロル・ウィルソン。ニックネームはなぜかダックスープだと笑った。大きな村でロングハウスが一時は40棟もあったという。多数のポールが持ち去られた。ここ出身で生きのびたイーグル・チーフとワタリガラス・狼族のチーフは、今もスキッドゲートに住んでいる。ハイダの霊が最も強く残されている村だ。キャロルの説明の話は極めてわかりやすい。子供たちがカナダのキリスト教伝道学校に連れ去られる様子を語ってくれた時、彼女が泣いているように見えた。

トゥアヌー村には、あのビル・リードのお墓がある。薄暗い森を行くと、海を見通せるところに小ぶりだが品の良い墓標があった。生前の彼の希望により、ここに埋葬されたのだという。キャロルの話しぶりから、この芸術家がどれほどハイダの人々の支えとなっているかが、良くうかがえた。キャロルがハイダ語を1つ教えてくれた。ハウア（Haaw'a）と、ハに力を入れよという。こんにち

は、あるいはハローである。以後各地でハウアが十分通じたから、重宝した。

海を行き、いくつかの上陸地点で熊を見た。ラッコが何頭か、ぶかぶか浮きながらこちらを伺っている。ラッコは体長が50センチから150センチ。剥いだ皮がぶら下げられている昔の写真をみると、人の背丈ほどもある。ラッコの毛皮が珍重される理由は、その細くて柔らかい毛足だ。わずか1センチメートル四方に、なんと10万本もの和毛にこげが密生しているという。これが冷たい海の水からラッコを暖かく包み、浮かべた。仰向けに浮かんで、石を使って貝を割る姿がよく知られているが、手当たり次第の捕獲にあった動物たちは救済の暇もない。ロシアが正式にアラスカを領有宣言したのは1799年だが、わずか68年後にアメリカに売却してしまったのも、ラッコやビーバーを獲りつくしてしまい、もはや価値なしと判断したため、という説もある。いやはや、鯨たちだって危うかったし、いまやマグロだって危うい。人間がいる以上、コモングの悲劇というのはきりが無い。

### 5) グワイ・ハーナスの宿泊施設

タヌーからローガン湾、さらにクレセント入江に入ってゆくと、岸辺近くの鏡のように静まり返った海上に、ぼつんと2階建ての家が浮んでいる。グワイハーナス・ゲストハウスだ。数年前にスキッドゲートで組み立てられ、ここまで曳行されてきた。1階にダイニングがあり、客室は6つ、定員12名ほどである。ゾディアックのツアーやカヌーイストなどがここに滞在する。公園内では酒類の販売が許されていないのでワインもビールもないが、食事はおいしい。トイレは水洗、ただしシャワーなし。遠隔地であり、汚水処理が大変なため、水の消費は最小限に制限されている。ここではカヤックを借りて周辺の海に漕ぎ出すことができるから、海鳥類の観察にも都合がいい。まったくの静寂に浸りたい人、星を見ていたい人には嬉



クレセント湾のフローティング・ロッジ  
(グワイ・ハーナス国立公園)

しいところ。たった1人のスタッフが、クッキングからハウスキーピングのすべてをこなしている。さぞかし休みが待ち遠しいに違いない。

ここもまるで人跡未踏のように感じられるところだが、この湾の一番奥から西海岸に向けての道路建築計画があった。銅鉱山・鉄鉱山ブームはなやかなりし時代、このあたりもけっこう賑わっていたことなど、まことに思い浮かべる事すらむずかしい。

グワイ・ハーナス南部、Ikeda Bay からスカン・グワイの中間にあるもう1つの宿泊施設が、ローズハーバー・ゲストハウスである。ここが国立公園になる前の1978年にスーザンたちが、昔の捕鯨基地だった建物を利用し住み始めた。20世紀前半、日本人もここで働いていたことは先述のとおり。錆びた鉄製の同社のパネルが、道端に打ち捨てられていたりする。スーザンの年恰好からすると、あるいはここに見るライフスタイルから、70年代のヒッピー文化を思わないではいけない。彼女たちは家の裏の畑で野菜を作っている。電気はない。ろうそくとランプの生活である。トイレも汲み取り式で、匂い消しはスギのおがくず。夜中に尿意を催したら室内のバケツにして、朝それを海に捨てよ、との指示があった。

目の前の海を覗いてみると、浅瀬にウニがびっ



20センチも30センチもありそうな巨大ウニ  
(グワイ・ハーナス国立公園)

しりである。赤いウニと黒いウニがあるが、直径は30センチくらいあろうかという巨大さである。ガイドのブライアンがボートからオールでつついて拾い上げ、ナイフで割って食べさせてくれた。これだけ大きいと有難味がない。まことにもったいないことである。ゲストハウス前の浅瀬にはどこまでも、巨大なウニが折り重なっているのである。これならラッコも生きやすいと思われるのだが、今なおラッコの方はレッド・データ・ブックに載ったままだ。こんなにいっぱいウニでさえ、漁師たちがやってきたら、数日で消えるだろう。AMBの規制が続き、ラッコがこの湾に帰って来る日が待ち遠しい。

ここに何人か、若い旅人(Globe-trotter)が住み込みで働いていた。28歳の、仮にハルコさんとしておくと、彼女は何年か前ツアーでここに来たことがある。そのあと世界一周という夢を実現させるため会社を辞め、ヨーロッパからまたここまで回ってきた。スーザンに頼み込んでしばらく働かせてもらっているのだという。これから南米に行くというから、サンパウロの知り合いを紹介した。心強いではないか。若者たちは十分な動機さえ見つけたら、どんどん外に出て行く。今時は1980年代のように、猫も杓子もハワイだパリだとは浮かれてはいないかもしれない。しかし、確た

る目的をもって海を渡る若者の数は、当時より多いのではないかとしきりに思う。

ゲストハウスのシャワーは、高校生ぐらいに見える全く無口の少年が、屋外のドラム缶に、まきを燃やして釜を焚いていた。スーザンがつくる食事はとてもうまい。量もたっぷりある。浮世とはまったく途絶したような環境で暮らすのも悪くないかもしれない。彼女はどのようにここを選んだのだろう。どこから来たのか。たまたに里帰りなんかするのだろうか。そういえば1968年に、スチュアート・ブランドは彼の『ホールアース・カタログ』で、“Stay hungry, Stay foolish”というセリフを世界に広めた。貪欲に、愚直に。貧者として素直に生きよ、と聞こえる。ここは野鳥の天国でもある。

## 6) 世界遺産スカン・グワイ

スカン・グワイの意味は、「泣き叫ぶ島」だと、ハイダのガイドブックには記載されている。なぜなら、島の岩礁にある潮吹き穴から海水が吹き上がる時、まるで女の人が泣き叫ぶように聞こえるからだ(たんに「赤い鱈の島」という説もある)。白人はアンソニー島と命名した。ときにニンスティンツとも呼ばれたが、これは昔の村の酋長の名前から来ている。さきに登場したコヤの後継者だ。2007年に正式名称がハイダ名となった。スカン・グワイは東西にも南北にも1キロはない小島だが、さらに周辺を27の小島というか岩礁群に取り囲まれている。大昔の火山活動によって出来上がった島なので、細かな入り江やリーフも多い。そうした岩礁群はまた、トドやアザラシに格好な棲息地を提供している。\* (4.8)

世界遺産になっている廃村跡は、島の東側の海に面している。上陸は北側から。ウォッチマン・キャンプがあり、カヌーでやってきた何人かがくつろいでいた。キャンプの建物の壁に、小さな救命ブイがかけられていて、何気なく見ると大船渡



スカン・グワイのウォッチメン・キャンプ

という文字が書かれていた。やはりここにも来ていたかと思ったのだが、津波のデブリ（ゴミ）はアラスカからカリフォルニアまで、どこでも見られている。ハイダ・グワイのあちこちにたくさん来ているはずと、ここに来る前には気にしていた。でも、スカン・グワイで初めて、それも小さなブイひとつにお目にかかった。船名が書かれてあったのにどうしても思い出せない。なぜメモしなかったのかと不思議である。

ショーンというウォッチマンが、島の案内をしてくれた。ここには10種、4万つがい以上の海鳥が棲む。150年の間無人だったし、この離島群には哺乳類というか肉食獣がない。それで鳥たちの天国ができあがった。ウミスズメ、ウミツバメの類がよたよたと海上を飛んでゆく。パフィン（ツノメドリ）、ミズナギドリやカモメの類も無数である。さらに16種の鳴鳥、森に住むハヤブサ、クマタカ、フクロウ、白頭ワシなども勢ぞろいしている。

小さな島と思えないほど、島の中に足を踏み入れると森は深い。思わず見とれるくらいの巨木群にふかぶかと苔やサルオガセがまとわりついている。板張りの細い道を行くと、集落の畑のあとがあった。ショーンの解説では、この村こそが、ファーストネーションの島としては、世界で最も価値のある史跡だということだった。多くの死者が

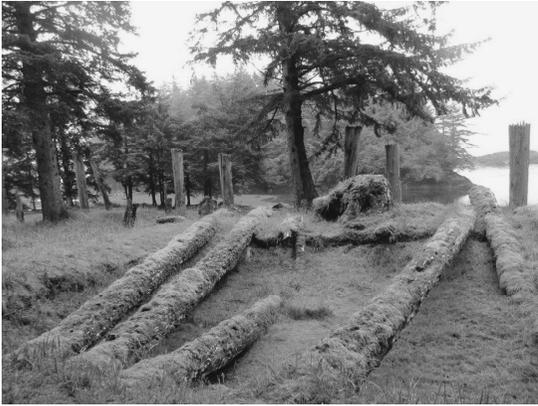
眠る聖地でもある。人々が住んだ洞窟や古墳もある。たくさんのポールがあり、20棟あったロングハウスの柱、梁、角材が苔をまとって、横たわったり立ったまま朽ちかけている。天然痘が猖獗をきわめたとき、生き残った南の村々から人々はここに集まってきた。そしてそのあと、スケダンスからスキッドゲートへと逃れた。

東の浜に向かってさまざまなポールが立ったり、斜めになったりしながら林立している。おもな正面柱などは、ほとんどといっていいくらい持ち去られてしまったが、それでも風雨にさらされつつ、多くはそれぞれ何かを訴えかけつつ存在する。浜辺にはかれらのカヌー溜りが残されている。浅瀬は引き潮時しか小さなカヌーといえども出入りできなかった。敵の襲来も防ぎやすかったのである。ハイダの人々の夢のあとなのか、と思った。消えゆく遺跡なのだが、ここはハイダの聖地として永遠にのこる。島の土に、洞窟に、森の中に、精霊たちのスピリットが満ちている。考古学上からも、スカン・グワイ全体が世界遺産にふさわしい、カナダが世界に誇る自然と文化の宝なのだ、ショーンは静かに語った。

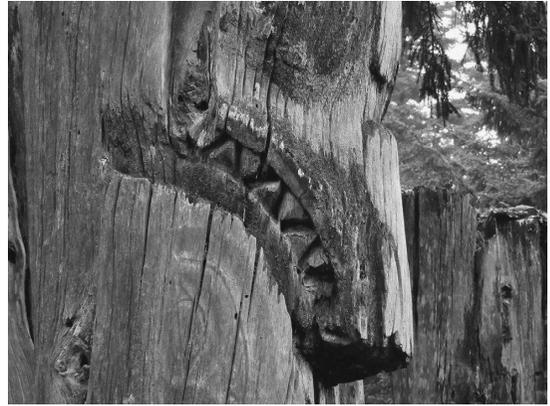


出所：Ninstints-Haida World Heritage Site

スカン・グワイ集落の復元図



ロングハウスの跡、棟木が何本も横たわっていた



ポールに刻まれた狼。風雨にさらされ、  
少しずつ消えてゆく

## 6. グワイ・ハーナスの観光マネジメント

### 1) 自律的ツーリズム

まったく他のどこにも例のない世界遺産である。1981年という早い時点で、世界遺産に登録された。見てきたとおり、だがほとんど知られることがない秘境である。「宗教、国境、民族、文化の壁を越え、人々がお互いを認め合い理解しつつ、そこを共通の財産として後世に残す平和維持のしくみ」というのが世界遺産の意義である。まことにグワイ・ハーナスほど、その理念を伝えるのにふさわしい場所はない。だが、だからといって年間ここを訪れる人が、世界中からわずか2000人でもいいのだろうか。仮に2000人が117ドルの入場料(シーズンパス)を買ったとしても、公園管理費は200万円に満たない。また仮に、2000人が4.5泊ハイダ・グワイに滞在し、1人当たり1000ドルを落としたとしても、2億円に満たない。せめてだが、現在のAMBが設定する年間の総枠3万3000人泊を一杯にするくらいの、自律的努力がなされなくてはいけないのではなからうか。いまの平均4.5泊を当てはめてみるとざっと7000人分である。ほぼ現状の3倍。このくらいは、あるいは年間1万人くらいの目標でもいいと思われる。と

すれば、ハイダの人々の収入も多少は増えるに違いない。文化財を大切にするのは当然である。しかし、世界共通の財産も、ほんの一握り、年間たった2000人ほどにしか体験させられないのでは、あまりに宝の持ち腐れ、ということにならないか。別に富士山などを持ち出すまでもない。世界中にある962カ所(2012年現在)という世界遺産の中で、年間訪問者が2000人のところはいくつあるだろう。今や南極大陸にだって、年間1万人近くの人が訪れる時代である。

というわけで、ではなぜ最近十数年ここへのツーリストが漸減傾向にあるのかを考えてみた。すぐに出てくる答えは、「ツーリストがまた行きたい」と思うようなサービスが提供されていないからである。アドベンチャー志向の若者をいうのではない。アドベンチャーはそう何回も行かないし、そもそも分母が少ない。カヌーやカヤックの愛好者にしてもしかりである。この人数が減少してきたのは、ここまでやって来られる時間と予算的余裕のあるInnovatorたちが一巡したか、全く知らないかのどちらか。

### 2) 最もふさわしい客層に向けて

筆者が言いたいのはもう1つのカテゴリー、ゆとりある中高年のソフト・アドベンチャー志向層

のことである。ここに対するアピール、宿泊関連施設の基盤整備が不十分である。

ゾディアックでグワイ・ハーナスを巡るとするのは、心躍る体験である。しかし、一日何回かの上陸時は、すべて Wet landing だ。重いゴム引きレインギアを常時着用しているから、行動の自由がきかないうえ、長靴も重い。ボートからの乗り降りにまことに骨が折れるのだ。ツアー価格は多少高くても、もう少し快適なボートが提供できないだろうか。せめて濡れなくて、キャビンも暖かい小型ボートくらい。自然との一体感は多少薄れてしまうかもしれないが、アクティブ・シニアとはいえ、大半の本音からすれば濡れたり寒かったりするのには堪える。Dry landing 用の簡便な梯子だってすぐに用意できるはずである。

次には宿泊施設だ。先に紹介した通り、広大な国立公園の中に、ごく小規模なものがふたつしかない。しかも、一般の観光客にとっては到底快適とは言えないサービスレベルにある。シャワーが無かったりトイレがあのような状況では、一般の観光客はひるんでしまう。民家にお邪魔させていただく、という雰囲気も普通にはなじみにくいし、気楽な旅の解放感からは程遠い。電気がなく、寒い、というのもまた。熱効率のいい建物と、小型の発電機があれば十分なのである。世界中の観光地には、デラックスではなくてもいいから「上質な」時間が過ごせる、「快適な」空間が要求されている。中高年のソフト・アドベンチャーこそが、それを求めているのである。レストランでも、ワインが何通りか選べるくらいならさらに嬉しい。

そこそこ快適で、ゆったりした時間が過ごせる宿泊施設が、フローティングであれ固定であれ、せめて数カ所は欲しい。これだけあればツアー日数も、無理矢理3泊4日あたりに抑え込む必要はないし、トイレだってエコロジスト100%を気取らなくて済むであろう。

こういったレベルのインフラがもし整ったとすれば、中高年旅行者の満足度は格段に跳ね上がるにちがいない。

提供されるサービスの満足度が期待値を恒常的に上回れば、顧客連鎖が発生する。口コミでもインターネットでも、とくに後者のそれは、時間と空間の壁を瞬時に越え、今や地球の隅々にまで伝わるようになっている。

このカテゴリからすぐ連想されるのは、アドベンチャークルーズ船誘致である。カナダからアラスカへのインサイド・パッセージは、北米クルーズ市場にとってのドル箱になっている。これらのクルーズ日程に、グワイ・ハーナスを入れるよう営業活動を強化すること。クルーズの利点は、環境に与えるマイナス・インパクトが少ないことである。かれらは船内に宿泊するから、受け入れ側に負担はない。北極圏や南極方面にも最近は大船が訪れ、ゾディアックで数カ所に上陸観光を行なっている。きちんとした船内レクチャーにより、観光客はいながらにしてエコツーリズムのインタープリテーションを受けることができる。それらのクルーズ客を通じ、ここを世界にアピールすることができれば、カナダにとってもハイダにとっても、あるいは直接的経済効果は少ないかもしれないが、PR効果は大きい。グワイ・ハーナス独自の観光ルールの徹底もクルーズ船なら容易である。

### 3) 年間100日営業を脱するために

つまり現状における AMB のDESTINATION・マネジメントは、いささか独りよがりなうつつなのだ。あるいは、当初の完璧 SIT 志向用から抜け出せていないし、AMB という会議の構成メンバーからして、モダン・ツーリズムのマネジメント専門家を欠いているとしか思えない。あれだけの素晴らしい自然と、筆舌に尽くしがたい文化遺産が、素材のまま放り出されている。つまり高

級野菜と極上の肉を持ちながら、いいコックがいないレストランのようなものといえば、わかるだろうか。

AMB にせよ、カナダ観光局にせよ、このことをもっと真剣に検討するべきである。そして最低限の投資を考えなくてはならない。そうすれば現在に年間100日という営業期間も広げられる。投資の仕組みはBC州が主体でも民間でもいい。要はAMBにその結果としての十分なメリットが残せればいい。サステナブルなツーリズムのマネジメントに関しては、あるいは公園管理に関しては今更言うまでもないほど、ノウハウは各方面に重ねられている。あとはしっかりしたビジョンのもとに、目標を立て、モニタリングを行いつつ、思い切った経営判断を行うことだけであろう。

現状の利用状況では、あまりにもったいない。

最後にもう1点。スキッドゲート部族会議(Skidegate Band Council)が2000年にスワンペイに設営した、若者向けキャンプ場について。子供たちにハイダの自然と文化を体験させるため、という目的で作られたものだが、BC州政府などが音頭をとって、州内のサマーキャンプにもっと多くの子供たちを参加させられないだろうか。ハイダの文化を体験させるのに、あまりに生真面目になってしまうのもよくない。楽しい自然体験がた

くさんできる教育素材に事欠かないのが、ハイダ・クワイであり、グワイ・ハーナスである。

#### 4) ハイダとマオリについて

ニュージーランド(NZ)にはマオリという先住民がいる。最初にNZに上陸し測量などを行なったのが、かのキャプテン・クックだ。1779年、彼の第1回の南太平洋周航時である。当時NZに住んでいたマオリは、10万人から20万人。彼らの人口も病気や戦争で激減したが、現在のマオリ系はおよそNZ人口の14%、60万人にまで回復した。しかし現在マオリ系はすべて混血である。もはや純粋なマオリは1人もいない。だがマオリの文化はNZ人の誇りにまでなった。

歴史的背景を振り返ってみると、ハイダとマオリは全く重なって見える。現在ハイダ・グワイに住んでいる人口4000人にも、カナダやアメリカ北西部などに移って行ったハイダにも、もはや純粋なハイダは残っていないであろう。しかし彼らの誇りも、マオリと同じである。双方とも文字を持つことがなかった。口伝と彫刻で自らの歴史と文化を伝えた。しかしハイダを襲った運命は、マオリよりも過酷だったと言えるかもしれない。

日本にやってきたザビエルが上陸したから、鹿児島にザビエルという名前が付けられ、ペリーがやってきたから東京湾がペリー湾になり、彼が乗ってきた船名から下田がサスケハナという事態になっていたらどうだろう。ハイダ・グワイやグワイ・ハーナスなど、かれらの地名そのものさえ、ようやく最近になって復権しはじめたばかりである。このことを考えると、スカン・グワイの世界遺産登録というのは、ハイダにとって実に大きな歴史の転回点だったし、ビル・リードたち芸術家が果たした役割もまた絶大である。

BC州立大学の考古学博物館、ビクトリアにあるBC州立博物館、そしてスキッドゲートのハイダ・グワイ博物館を、今回つぶさに見て回った。



ウォッチマンの話を聞く(スカン・グワイ)



ハイダの人々のパレード  
(スキッドゲート・ハイダ博物館前で)

ハイダ・グワイの自然を背景とする彼らの驚くべき芸術文化が、その歴史が、それぞれ見事に展示されていた。オタワの国立博物館をはじめ、カナダやアメリカ各地に、もっと多くのハイダの遺産が散在している。歴史のかなたに消えるのではなく、多くの人々に、生きたハイダの文化を未来に伝えるきっかけになるなら、それもまたよしなのだろうか。

モースビー・キャンプからグワイ・ハーナス周遊のツアーに出発したのは8月下旬だった。気温は15度。天気がかかる変わる。外海に出ると波をもろにかぶることがある。曇り空から雨になることもあり、上下しっかりした雨具、救命ジャケットも常時着用しなければならない。湾の奥や入り江に入ると、海面がまったく鏡のようになる。ヨットがぼつんと浮んでいたり、カヤックを漕いでゆく人にも、たまに出くわした。まさに Super Natural を体感する。空が晴れ上がり、陽がさしてくると水の色が一変、すべてが澄みきって見える。曇りの時はサンクリストバルの山々が、遠く濃淡を幾重にも描きだして、墨絵のように美しい。海面すれすれをウミツバメが不器用に飛び、あるいはボートを避けるふうもなく浮かんでいたりする。

ガイドのブライアンは21歳だった。長身で無口

である。一見ふてくされているようにも見えるのだが、カナダ人によくある素朴で素直なタイプ。ゾディアックを苦もなく操り、ネイチャーガイドをする。宿に着くとギターをぼろぼろ弾いている。向こうから話しかけてくることはない。冬の間は何をするのか聞いたら、車でカナダ大陸の反対側まで行き、大西洋に浮かぶニューファウンドランドに渡って、あちこち一人旅をするのだそうだ。車の中で寝るから、お金はかからないと。

おわりに

グワイ・ハーナスでブライアンの口から、「アリチカ・イケダ」という人名が、ごくあたり前のごとく出てきてびっくりした。後で調べてみると、アーチャー・イケダとして、このあたりではかなり知られた人物だったようだ。それで思い出したのが、新田次郎が書いた『アラスカ物語』である。19世紀末、おそらくこのイケダ氏と同じころ、北極圏のエスキモーと暮らしたフランク安田氏の話だ。このあとにも当時のカナダの日本人について触れるが、カナダ最後のフロンティアと白人がうたったハイダ・グワイまで、女性たちを含む結構な人数が来ていたことに、感慨を深くした。アリ



ハイダ・アーティスト、グージャウ氏(左)と彼の作品カヌー(スキッドゲート博物館)

チカという響きからすると備前岡山藩・池田家、お待さんの家系の人かもしれない。フランクもアーチャーも、海外雄飛型明治人の先達だったのである。

K・ダルツェルは彼女の3巻の本で、しらみつぶしにハイダ・グワイ（クイーン・シャーロット島）のことを書いた。とくに第2巻ではハイダ・グワイを20区にも分け、それぞれの地図上に詳細な地名まで、手書きで書き込んでくれている。徹底して文献やアーカイブを渉猟し、当時の地方紙の細かな記事から、多くの人々へのインタビューまで、よくもまあここまでという掘り下げぶりである。そのおかげで当時の Ikeda Bay や、イケダ氏の写真にもお目にかかることができた。

ハイダ・グワイのあと、バンクーバーからビクトリアに行き、バンクーバー島の太平洋岸にも回ってみた。文中に出てきたヌートカ湾の少し南に、トフィーノという人口1850人の町がある。現在太平洋沿岸国立公園になっている一帯である。そして、ビクトリアの少し北、ジョージア海峡に浮かぶソルトスプリング島（人口7000人）にも足を伸ばした。本土との間に浮かぶたくさんの島々が、目下観光で脚光を浴び始めている。そんなカナダの離島観光の現状を見てみたかったからだ。

トフィーノの背後には標高2000メートルを超える、ストラスコナ州立公園の山々がそびえている。やはり雨量が多く、このあたりの森林はハイダ・グワイとよく似た、モミヤスギの巨木が多い。1959年にジョージア海峡側からの道路が開通するまでは、ビクトリアなどから太平洋側のトフィーノ方面へは、船便に頼るほかなかった。1792年にここに来たスペイン人たちの先達がキャプテン・ヴィンセント・トフィーノ、当時この辺りを仕切っていた先住民がクレイオクォット族、そのチーフがウィカニニッシュとといった具合に、18世紀以降の懐かしい名前が多く残る。チーフの名前は現在ここにある人気の高いホテル名にまでなった。

このホテルの売り物は、真冬の太平洋から押し寄せる荒波が、遠浅の浜辺に押し寄せるシーンを眺めること。「何もない」ところだったが、これで人気に火がついた。

ソルトスプリング島のガンジースという町の中に、ちいさな日系人移民記念公園がある。その歴史を語る写真と解説パネルによると、この島への白人などの移住は1859年に始まり、1895年にはもう10人の日本人が住んでいた。1901年の記録はこの島の人口558人、出身国籍は15カ国、日本人は59人で、全体の1割を占めている。1908年、カナダへの日本人移民は年間、男のみ400人に制限。41年に太平洋戦争が始まると、2万2000人の西部カナダ在住日本人は「エネミー・エイリアン」として財産も没収され、内陸部に強制移住を余儀なくされる。戦後46年には4000人が国外追放されて日本に帰った。カナダ政府による公式謝罪は1988年になってから。といったぐあいに身につまされつつ、ハイダのことなどと重ねて印象深かった。この地からまた、ハイダ・グワイに渡った日本人がいたはずではなかったか。ガンジースの街角には寿司屋があったし、酪農・ワイン・観光をベースにした島の雰囲気はとてものんびりしていて、居心地がいい。

ビクトリア近辺は島々も含め、とくに本土との海峡側は温暖好天が多く、真冬でも東京より暖かいときがある。しかも夏は涼しい。それでシニア層が退職後カナダ全土から移住してくる。一人暮らし老人も多いが、ハンディキャップがある人でも気軽に外に出歩けるバスや、社会常識やシステムがシニア仕様になっていて、観光客の立場からも心地よい。新聞広告などにも、シニア向け生活お助け補助器具各種が並び、なかなか面白かった。

ビクトリアをインナー・ハーバーから眺めると、正面に重厚なエムプレス・ホテルがそびえている。すぐ右にBC州立博物館をはさんで州議事堂。双方とも1900年代初頭にフランシス・ラッテンブリ

ーという24歳の若者が設計した。当時ここにあった石炭会社が海を汚していたので州政府は話をカナダ太平洋鉄道 (CPR) に持ちかけ、港のクリーンアップとランドマーク建築双方をもくろみ、1万1000坪の土地も提供したという。一挙両得作戦が当たって、ビクトリアは目下世界中からの観光客を集めている。町中1500本の街灯に美しいフラワーバスケットが吊られている。多くのビクトリア大学の学生たちが、アルバイトとして花の手入れを請け負っているのだと、タクシーの運転手が教えてくれた。

1905年に当時の CPR 社長だったトーマス・ショーネシーが、インド統治を含め大英帝国最盛時のビクトリア女王にあやかり、Empress と命名したというのがホテル側の説明である。ショーネシーの名前は、現在 BC 州立大学界隈の高級住宅街にも残されている。

そういえば、エムプレス・ホテルの宿泊支払明細書を眺めていたら、国税が5%、州税が10%、それに「デスティネーション・マーケティング・フィー」1%が加算されている。なるほどと思った。国は外交と国防に、その他のことは各地方に任せる。地域は地域で観光行政用の特別課税までやりつつ財源も確保する。それであんなにきれいな街並みや公園整備ができるのなら、オリンピックに向けた東京はじめ、日本各地の魅力再生計画も前に進ませられるかもしれない。観光はハード系の大型投資に比べれば、大した金額は要らない。しっかりした将来のビジョンと、地域の「やる気」である。地域の人たちがその気になって力をあわせないと、結局何も動かない。今回カナダに2週間ほどいて、改めてその感を強くした。

カナダという広大な国に行くと、その都度いろいろなことを学ぶ。しかし今回のハイダ・グワイは格別だった。ある程度想像はしていたが、実際のそれとは格段の差である。地球の歴史と、人類の歴史と、先住民族の文化と、旧大陸と新大陸に

住む人びとが「再会」したプロセスを、現場検証させられたというか、あらためて学習させてもらった。先住民族がもつ歴史は長い。それに比べて、新大陸に「白人たち」が現れたのは、たかだかこの500年と少した。さらにそのなかで、南太平洋から新大陸の北極圏まで、いかに大きな変化が引き起こされてきたか。あるいは最近のたった100年、さらにこのわずか50年という短い期間の中で何が起こったか。人類の歴史はどこに向かっているのか。

ハイダの歴史が示唆するところは途方もなく大きい。

#### 参考資料・文献

- (1) “Totem Poles - An Illustrated Guide” UBC Press (2002).
- (2) “Ninstints - Haida World Heritage Site” UBC Press (2008).
- (3) “2013 Trip Planner” Guwain Haanas Administration, Haida Nation.
- (4) “2013 Guide to Haida Gwaii” Observer Publishing Co., Ltd.
- (5) “Haida Gwaii International Travel Maps” ITMB Publishing (2012).
- (6) Kathleen E. Dalzell “The Queen Charlotte Island Volume 1. 2. 3” Harbour Publishing Company Co. Ltd (Vol. 1 /1968, Vol. 2/ 1973, Vol.3 /1989).
- (7) “Haida Gwaii Marine Market Sector Analysis” Gardner Pinfold Consulting (2010).
- (8) “Visitor Guide” Haida Gwaii National Park Reserve, National Marine Conservatoin Area Reserve, Haida Heritage Site. Gwain Haanas Office (2013).
- (9) Tamara Eder “Whales and other Marine Mammals of BC and Alaska” Lone Pine Publishing (2001).
- (10) Daryl Fedje “Haida Gwaii; Human History and Environment from the Time of Loon to the Time of the Iron People” UBC Press (2005).
- (11) 池澤夏樹 (2004) 『パレオマニア』集英社インターナショナル。
- (12) フランク・マクリン (2013) 『キャプテン・クック世紀の大航海者』東洋書林。
- (13) ジャレド・ダイヤモンド (2000) 『銃・病原菌・鉄』草思社。
- (14) アルフレッド・クロスビー (1998) 『ヨーロッパ帝国主義の謎』岩波書店。
- (15) [http://www.minneapolisfed.org/community\\_education/teacher/calc/hist1800.cfm](http://www.minneapolisfed.org/community_education/teacher/calc/hist1800.cfm)

- (16) 星野通夫 (2006) 『森と湖と氷河』 世界文化社
- (17) デイヤー・ブラウン (1972) 『わが魂を聖地に埋めよ』  
草思社
- (18) <http://www.aadnc-aandc.gc.ca/eng/1332939430258/1332939552554>